HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ピョートルⅠ世の活字帝国
Author(s)	林, 健太
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16982号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16982
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99826
Type	doctoral thesis
File Information	Kenta_Hayashi_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：　林　健太

学位論文題名
ピョートル一世の活字帝国

本論は、ピョートル一世（在位 1682-1725）が社会の紀律化、宗派化、科学組織を定着させ近世の帝国統治システムを構築する際に、印刷術が不可欠であったことを論じる。従来、印刷術の重要性は、不特定多数の市民が読書を通じて言葉や思想を相互に議論し共有することを前提に論じられてきた。この「議論する」印刷術は、読者層が限定されたピョートル一世時代には未成熟であった。読者がいないにも関わらず統治者が印刷事業を続けるという矛盾を説明するために、本論は書物の「書き手」である統治者の動機や印刷術による変化に注目する。印刷革命論と声の文化論から展開してきた活字、声、人間の視覚・聴覚の関係性の変化に着目し、ピョートル一世が命令を活字で印刷し、それを聖職者たちの朗読を介して臣民に一方的に届ける紀律帝国の統治システムを構築したことを明らかにする。

本論は 17-18 世紀にロシア帝国、ウクライナ、エストニアで出版された書籍やポスター、勅令といった刊本を分析対象とする。こうした印刷物は、統治者の声であり、統治者たちが見た、あるいは命じる読書行為を反映する。この観点から、統治者たちの声に現れる理念型として帝国統治システムを描出する。その際、出版物の全体像を描出する手がかりとして、ソ連時代に作成された関係図書館の蔵書目録を利用する。他方、印刷物に対する当時の臣民の読書行為を明らかにすることは、読書の痕跡を残す史料が限られ困難である。その中で、古儀式派たちの読書と論争は、命令の外の読書行為を示す貴重な記録である。そして、書物が印刷されるまでの執筆や訂正といった過程は、印刷所の運営や指示系統、権利関係や労働条件を記した書簡や契約書から読み取る。これらの未刊行史料はロシア国立古文書館とタリン都市文書館で収集した。刊行史料としては、20 世紀初頭までに雑誌に翻刻された書簡史料や法令集を中心に利用した。

本論は次の 6 章から構成される。第一章は、17 世紀からの読み書き教育と統治システムの背景を概観し、ピョートル一世の統治システムが、印刷術の機能を利用して統治者の声を帝国の至るところで再生させることを踏まえていたことを論じる。17 世紀以来、教会では書物を朗読する慣習が教授された。ピョートル一世時代には、新たに世俗書用活字が開発され、印刷物の形式や活字のデザインがオランダやフランスを模倣して導入された。これは正書法や力点の使用などの 17 世紀以来の朗読する読書慣習と衝突した。ピョートル一世は、自らの声を活字で帝国全域に広める統治システムの礎に、教会で朗読する慣習を据えた。

第二章と第三章は、ロシア帝国の印刷所とその周辺の人々の構成に目を向ける。 第二章は、ロシア帝国の印刷事業の主軸となったモスクワ印刷所、そして新都サンクトペテルブルク印刷所の展開・設立過程を論じる。17 世紀来の印刷職人の伝統を引き継ぎつつ、ピョートルの改革によって外国からの職人たちの影響も印刷術に及んだことを明らかにする。加えて書物の書き手・翻訳者たちの構成を検討し、西欧大使節団に代表される留学生たちとともに、ロシアに移住した外国人の息子や、モスクワ公国が併合した地域の他信教の人びと、大北方戦争の戦場となったバルト沿岸都市で捕虜となった人々が参加したことも描出する。

第三章は、印刷術が信教や言語の差異を視覚的に明確化するという観点から、17 世紀後半から大北方戦争終結までの間に新たにロシア帝国に併合されたキーウ、チェルニヒウ、レヴァル（現タリン）の印刷所が、君主権の移動にどのように対応したかを論じる。これは、ハラルド・グスタフソンの「礫岩国家」論からピョートル一世期のロシアの政体を再考するものであり、従来、日本の研究者がこの見方を 18 世紀のロシア帝国に当てはめることに否定的であったことと対照的である。旧ポーランド・リトアニア公国領地域では印刷所とモスクワの関わりが深かったことで、当地の印刷所に対してウクライナ語による出版禁止という厳しい同化が遂行された。他方で、関わりの薄い

旧スウェーデン王国領のレヴァルの印刷所に対しては、印刷特権が維持された。帝国の中央政府は、二つの地域で相異なる統治方法を採ったのである。

第四章から第六章は、印刷術による社会の紀律化の諸側面をテーマごとに検討する。第四章は、印刷術がロシア正教会の宗派化に果たした役割を論じる。キーウ・モヒラアカデミーを経る学歴で共通する聖職者たちは、当地で先行した宗派対立を背景としつつも決して一枚岩ではなく、互いに権勢を競った。この聖職者たちと古儀式派たちは、書物を集会で朗読し、口頭の議論を書き留めて書物にする声と活字の往復運動の中で論争した。古儀式派のデニソフは、ニーコン以前の書物に書かれた信仰の正統性を立証するべく、ニーコン以降の刊本・写本を批判・参照し、自身の書物で注釈をつけ論じた。この読書行為は、統治者の命じる読書の秩序に抗う古儀式派たちに独自のものである。これに対して官許正教会の聖職者たちは、皇帝や教会の紀律に古儀式派が示した不服従に対する批判を印刷術で広めた。これは、池上俊一の示す、近世ヨーロッパの魔女裁判の激化に見られる宗派の紀律化と印刷術がもたらした負の側面と重なる。

第五章は、出版物の大部分を占めた法令を分析し、統治者が目指した統治システムを描出する。臣民の生活の様々な側面に積極的に命令を下す社会の紀律化は、声と活字、視覚と聴覚の共存する文化を基礎に導入された。他方でその限界は、逃亡兵への出頭要請や教会礼拝への参加呼びかけが繰り返されたことから読み取れる。本章はシベリア統治に着目し、多種多様な人間集団が居住する広大な版図で社会の紀律化を実現する困難に対して、統治者が郵便や行政の改革を印刷と組み合わせることで無秩序の克服を目指したことが明らかになる。事例としては、汚職の廉で死刑となったシベリア県知事を巡る法令出版を取り上げ、印刷が同質のテキストを周知することで勅令に真正性を与え権威づけたことを論じる。

第六章は、印刷術が学術機関の組織に果たした役割として地図作成に着目し、広大な版図を捉えようとする統治者の眼差しに印刷術がどのように作用したのかを論じる。17 世紀のロシアの地図は、河川や山脈を基準とした手書きで、複製による拡散を目的とせず、土地譲渡や紛争解決といった行政のために作成された。ピョートル一世は、印刷革命と科学革命の潮流を汲む緯度・経度を計測した印刷地図にロシアの製図法を転換した。この転換は、皇帝の航海術と海軍設立への強い意志の上に、西欧学者のロシア帝国領域への関心が重なることで活性化した。1701 年の算術航海学校の設立に始まる、17 世紀の科学革命を継承したモスクワでの教育は、印刷所と密接に関係して展開し、新都サンクトペテルブルクにも継承された。この教育を受けた測量士たちが収集した地理情報は、ピョートル一世がパリの王立科学アカデミーにカスピ海の地図を贈呈したことに象徴されるように、ヨーロッパと共有され、地図においてロシア帝国を「全世界の栄誉ある劇場」に加えた。

終章は、以上の 6 章を総括し、帝国的で命令的な印刷術が社会の紀律化の多側面に特徴づけられるピョートル一世の近世帝国の建設の礎であったと結論付ける。